

令和7年（2025年）1月23日外部評価実施
庄内地域包括支援センター（南部圏域）

「評価結果の概要」

センターが把握している圏域の特徴 2024年12月1日現在

【圏域の人口等】

圏域人口：41,570人 （前年12月1日時点 41,872人）

高齢者人口：13,723人 （前年12月1日時点 14,034人）

高齢化率：33.0% （前年12月1日時点 33.5%）

＊圏域人口、高齢者人口ともに減少傾向にあり、高齢化率も2021年をピークに徐々に低下しています。ただし、75歳以上の後期高齢者人口は増加しています。

【圏域の地域特性】

庄内圏域は豊中市の南の端に位置しており、神崎川、旧猪名川、天竺川に囲まれた平地です。大阪都心から近いため、高度経済成長期に木造賃貸住宅などが集中して建築され、急速に市街化されたため、今も古い木造住宅が多く、川に囲まれた低地であることから、災害時に甚大な被害が発生する恐れがあり、住環境や防災上の課題が多い地域です。近年は、古い木造住宅を解体して、新たに单身向けマンションや戸建住宅に建て替えるケースが増えており、街並みが徐々に変わりつつあります。

庄内駅周辺には市場やスーパー、商店街等があり、人通りが多い地域です。南西部エリアは中小の工場が多い地域で、スーパーや商店が少なく、交通の便も悪いため、高齢者にとっては不便な地域です。北東部エリアには大阪音楽大学やオペラハウス、文化ホールなどがあり、文化的な側面も見られる地域です。南部千成校区にはファミリー向けの大型マンションが複数建っているため、若年層も多く高齢化率が低くなっています。

少子高齢化の進行が著しい庄内圏域では、学校再編が進んでおり、R5年4月に北部の3つの小学校と2つの中学校が統合され、9年制の庄内さくら学園が開校しました。南部においても、R8年4月に3つの小学校と1つの中学校が統合され、9年制の庄内よつば学園が開校予定です。また、公共施設の老朽化が進んでいたことから、市役所出張所や公民館、保健センター、図書館、介護予防センター等をひとつに集約した複合施設「庄内コラボセンター」がオープンし、地域住民の新たな活動や相

令和6年度 庄内地域包括支援センター

談の場として賑わっています。

【医療・介護資源】

庄内圏域は高齢化率、介護認定率ともに高いため、他の圏域と比較して、介護保険事業所が多い地域です。一方、医療機関は他圏域に比べて少なく、庄内駅周辺に集中しているため、送迎サービスを行うクリニックや訪問診療専門のクリニックが増えています。

取組方針や特徴

【センターの運営方針】

- ・公的な機関として、公平・公正・中立を遵守します。
- ・できるかぎり、現場に足を運び、実際に目で確かめたうえで支援を行います。
- ・利用者一人一人の価値観を尊重し、本人の意向に基づいた支援を行います。

【特に力を入れて活動している点】

・地域に積極的に足を運び、様々な方々の話を聴くとともに、改めて地域包括支援センターのことを知っていただき、潜在的対象者の把握に協力いただくよう活動しました。

・庄内圏域のすべての金融機関と郵便局を個別訪問し、地域包括支援センターの案内を行ったうえで高齢者に関する困りごとを聞き取り、支援が必要な高齢者の情報提供を依頼しました。

・独自の包括新聞を作成し、夏と冬の2回、10,000世帯に職員自ら歩いてポスティングを行うことで、地域をくまなく見て歩き、課題のありそうな世帯の把握を行いました。

・各校区社会福祉協議会が開催している「地区サロン」「なんでも相談会」へ積極的に参加し、地域での困りごとや課題の聞き取りを行いました。

【活動中での課題やその解決策】

高齢化や事業所の閉鎖等で介護支援専門員の数が減っており、要支援認定を受けた高齢者のケアマネジメントを担当してくださる介護支援専門員を見つけるのが困難になっています。

⇒介護支援専門員が地域で安心して、より長く活躍できるようにするために、気軽に

参加できる困難事例検討会や、他機関との連携を進めるための交流会の開催、業務上の困りごとや悩みのヒアリング、困難ケースのサービス担当者会議への同席などを行っています。

総評

【特徴的な取組内容】

- センター独自の新聞を作成し、情報提供、啓発活動の主軸とし個別の配布対象を広げ毎年継続していることで、地域を細かに見ることができ、新たな課題の発見や現状把握を継続されています。地域のイベントや子ども向けの行事等にも参画し、地域とのつながりや地域ニーズの発掘にもつながられています。
- 看護小規模多機能居宅介護・小規模多機能居宅介護の職員との交流・意見交換を開催し、介護支援専門員が複合課題への取組みによる自立支援に向けた策定につながられるよう支援されています。
- 通いの場の継続支援として通いの場交流会が継続して開催されており、通いの場同士のつながりの拡充や、情報共有・情報交換の場として、確立されています。
- 高齢部会について、明確な目的をもち、顔の見える関係づくりから先の展開を意識されています。また、市民公益活動団体にも呼びかけを行い地域ぐるみで支えるための裾野を広げるための工夫がなされています。
- 支援に際してセンターが抱える課題について、困りごとをオープンにすることで、住民や社会資源にも協力を得ながら、取り組まれています。

【さらなる質の向上の余地がある点】

- コロナ禍の制限下において状況が変わった、圏域内各地域アセスメント・ニーズ把握・分析等を拡充することによって、通いの場の空白解消やオレンジカフェの拡充へとつながられる事を期待します。